今西直次郎

撚糸の洋式化

西陣織には機織の工程に至るまで実に多くの関連工程があり、どれ一つをとってもおろそかにできない重要なものである。

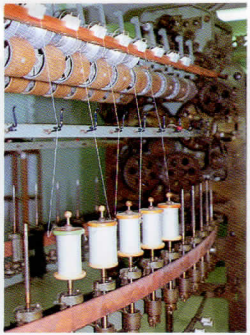
原料である生糸が、織物になるまでの第一に撚糸の工程を経なければならない。それぞれの織物に適した風合を出すために、細い何本もの糸を撚り合せ、糸の太さを整えたり、織物の表面に変化をつけるため、あらかじめ糸に強い撚りをかけるのである。

西陣では、明治のころまで、「チョンピュー」とよばれる手動式のものや、水車を利用した八丁式撚糸機が使用されてきたが、その応用技術については織屋の秘伝とされていた。

機織の洋式化と同じく撚糸のイノベーションもジャカード導入のころに始まっている。

明治六年、ウィーン万国博に渡欧した佐野常民らがイタリヤ式の撚糸機を購入し、これをもとに模作が始まったといわれている。しかし西陣における撚糸洋式化は明治十五年ごろからである。愛宕郡田中村に設けられた府立撚糸工場にフランス式撚糸機が導入されたことにより本格化する。このとき指導に当ったのが今西直次郎であった。今西は近藤徳太郎や稲畑勝太郎とともに京都府がリヨンに派遣した技術伝習生の一人であった。明治十年に仏人レオン・ジュリーにしたがって渡欧し、撚糸と製糸について研究し、五年後に帰国している。

当初の動力源は水力であったが、十八年ごろにはモーターに改良、明治二十年になってようやく設備は完全なものとなり、撚糸の機械化が西陣産地にも一般化してくる。明治二十年の撚糸量が五年前にくらべて約三十倍になっていることを見ても、いかに洋式機械の導入が生産性向上に役立ったかが解る。

同年に設立された京都織物会社が、ためらうことなくフランス式撚糸機を導入し、京都における最初の民間撚糸工場となったが、その背景には今西の研究と、それにもとづく実績があったからだと思われる。

（福本武久）